

地下式横穴墓の伝播

柳沢一男(宮崎大学教育文化学部)

1. 地下式横穴墓イメージの転換

南九州の古墳時代中・後期を特徴づける墓制として地下式横穴墓が知られている。かつては閉鎖的なイメージから、辺境の民「隼人」の墓制と見る見解<sup>(1)</sup>が大勢を占めたこともあったが、近年の調査進展によってその見方は大きく転換し始めた<sup>(2)</sup>。

まず、地下式横穴墓の継続期間。その出現は須恵器出現前にさかのぼること、衰退期は飛鳥Ⅱ期頃に

あるらしいこと、そして早い段階から墳丘を伴う例がみとめられること(前方後円墳では須恵器出現期前後の鹿児島県岡崎15号墳、円墳ではTK73型式期の同18号墳)、また宮崎県生目7号墳(TK47型式期古相)のように超大型の地下式横穴墓を後円部・前方部の墳丘下に構築する例なども判明している。また、追葬による複数埋葬も早い時期(TK216型式期頃)からみとめられており、九州北部に成立した横

穴式石室の影響下に出現した横穴系埋葬施設の一種と理解される。

一方、5世紀後葉頃に九州北部(おもに豊前)で成立した横穴墓の祖型に地下式横穴墓を想定する有力な仮説が提出され、さらに韓国忠清南道の百済王都周辺で、横穴墓とともに地下式横穴墓の可能性がたかい墓室が判明している。以下、5世紀後葉における地下式横穴墓の動向を紹介し、その意義について考えていることを提示したい。

2. 横穴墓の祖型は地下式横穴墓

2001年に開催された第4回九州前方後円墳研究会大会(「九州の横穴墓と地下式横穴墓」)のシンポジウムのなかで、横穴墓の祖型をめぐって多少の議論があった。

この問題について当時の研究状況を思い起こすと、福岡県竹並や大分県上ノ原などの大型横穴墓群の調査成果によって横穴墓の初現がTK208~23型式期にさかのぼることは判明していたが、その祖型については先行する横穴式石室(堅穴系横口式石室を含む)を想定する見解が主流であった。ただ、初現期横穴墓の玄室平面形は横長長方形・楕円形、略方形、縦長長方形と多様で、堅穴系横口式石室との関連が想定される縦長長方形の玄室をもつ横穴墓は、他のものよりも後出するのではないか、というものであった。

シンポジウムでは、5世紀代の地下式横穴墓の変遷を整理した和田理啓さんの報告(和田2001)を受けて、従来の見解を見直す雰囲気が生まれた。初現期

横穴墓の多様な玄室平面形が、同時期の地下式横穴墓のそれと酷似することが明確となったためである。地下式横穴墓の築造年代が整理されたことによって、異なる二つの墓制が密接不離の関係にあると予想されたのである。

その後、この問題に新風を吹き込んだのは田代健二さんだ。田代さんは、初現期横穴墓と同時期の地下式横穴墓の玄室形状を比較検討し、平面・立面形の近似

性と時期的整合性を確認して横穴墓の祖型として地下式横穴墓を想定した(田代2005)。そして、初現期横穴墓のいくつかに堅坑状の墓道がみつめられることから、まず地下式横穴墓がこの地に伝播し、それを基盤に横穴墓が案出されたと説明する。また、初現期横穴墓の玄室平面形の多様性を地下式横穴墓の出自をしめすものとして、横穴墓成立に影響を与えた地域を具体的に想定する。この点についてはもう少し厳密な検討が必要と思われるが、基本的な論旨には賛成する。

3. 5世紀後葉伝播の歴史背景

この問題を考えるうえで、百済の王都周辺地域で発見された横穴墓の様相と墓室構造は示唆的である(柳沢2005)。忠清南道公州・扶餘周辺で確認された横穴墓群は現在6遺跡が知られているが、今後さらに増えることは間違いない。横穴墓数が多く、全体のイメージが分かりやすい公州市丹芝里横穴墓群(宋山里古墳群の北西約6km所在)を代表させて概略を述べておこう(池珉周2005)(図5)。

丹芝里横穴墓群は高速道路建設に先立って調査が行われ、調査地内から6~7グループ計23基の横穴墓(数基の地下式横穴墓も含む)が検出された(横穴墓は高速道路予定地外に広がる可能性がたかい)。丹芝里の正式報告は未刊行だが、これまで公表されたデータによると、横穴墓の玄室平面形は縦長のもの(16基)と横長のもの(7基)があり、墓道は玄室に向かって急勾配で下降するものと、垂直に深く掘られたものがある。

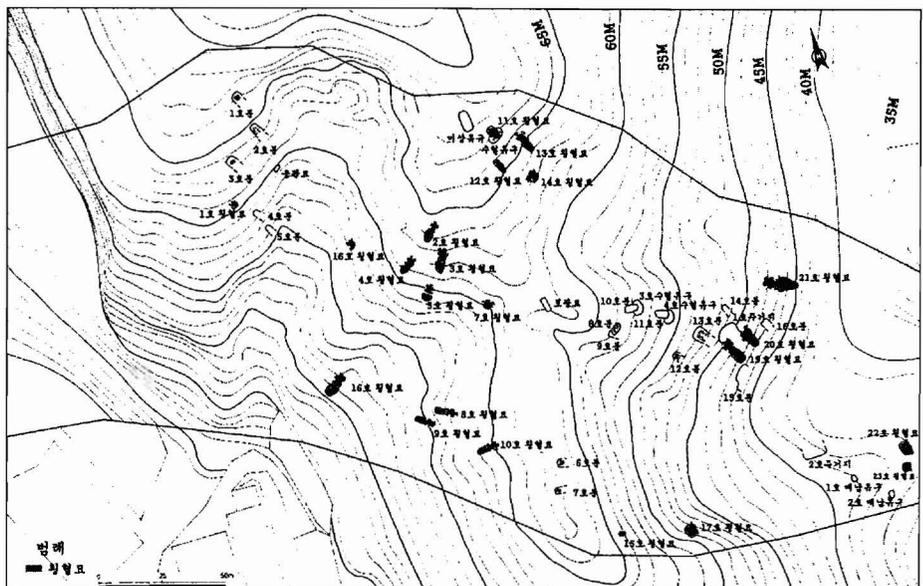


図5 丹芝里横穴墓群分布図

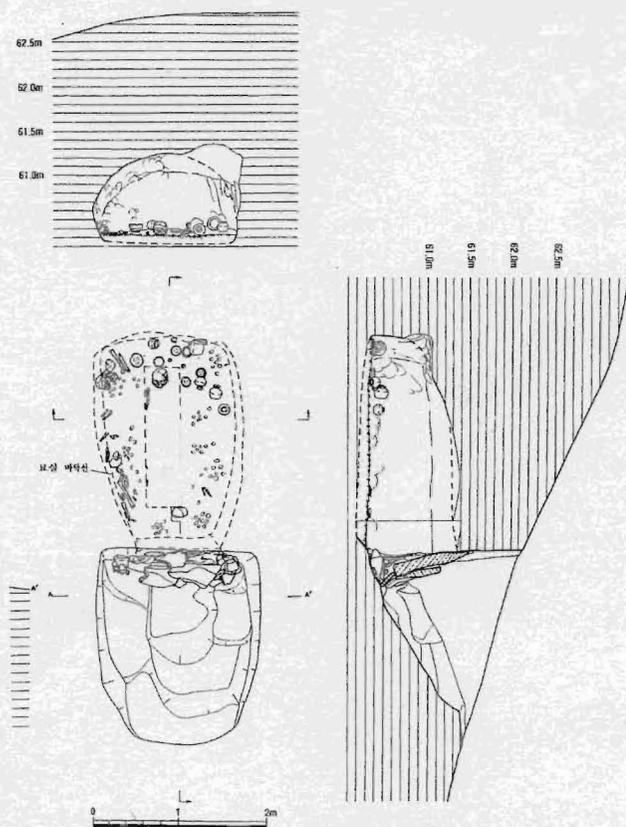


図6 丹芝里3号墓実測図



図7 丹芝里14号墓の入口閉塞状況

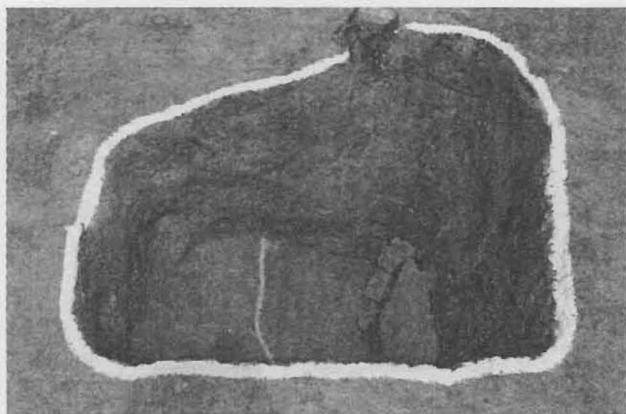


図8 丹芝里2号墓の竪坑

遺構実測図が公表された3号墓(図6)は、玄室プランが縦長で、出土した土器はTK47型式に近似する。一方、写真が公表された14号墓は、横長楕円形に近い玄室プランらしく、その閉塞は扁平な板石を立て並べる特異な構造である(図7)。こうした特徴は、宮崎県串間市崩先をはじめ、5世紀後葉の志布志布沿岸域に分布する地下式横穴墓に近似する。また2号墓(玄室構造は不明)の入口部は地下式横穴墓の竪坑そのものである(図8)。丹芝里の墓室は、竹並・上ノ原などの初現期横穴墓や南九州の地下式横穴墓と酷似しており、これらに埋葬された人びとは九州から渡来・移住し、この地で没した倭人の可能性がたかい。それでは、この九州系倭人はいつ頃、どのような意図で渡来したのか。

この点で興味深い文献記録がある。日本書紀雄略23年(479年)4月に、質として来朝していた昆支王の第2子・末多王を筑紫国の軍士500人に護らせて帰国させ東城王として即位させたとする記事である。公州周辺に分布する横穴墓や地下式横穴墓と、この記事にいう筑紫国軍士の関係を結びつける証拠はないが、限りなくつよい相関性を想定しうる。そうした想定に間違いがなければ、百済に派遣された軍士のなかには豊前や日向出身者が含まれていたことになる。

このことは、5世紀後葉一雄略朝期の軍事機構を解明するうえで重要だ。早くに田中新史さんや川西宏幸さんが指摘したように、日向における横板板鋌留短甲を副葬した古墳墓の突出度(宮崎平野部、えびの盆地に集中)は、朝鮮半島情勢(とくに、高句麗による百済への圧力の強化)に対応する軍事編成を表象する可能性がたかい。ただし橋本達也さんが指摘するように、この時期の甲冑分布は局所的集中が顕著であることを重視すれば、列島全域を対象とした制度的編成ではなく、王権(大王や王権を構成する有力首長層)と各地域首長との人格的關係を媒介とした個別的編成であつたらう(橋本2007)。

大隅地域の地下式横穴墓分布域では、肝属川をさかのぼった鹿屋市祓川から唯一の横板板鋌留短甲が出土している。近年、近接する薬師堂遺跡から30基を上回る地下式横穴墓(横長玄室タイプが主か?)が検出された。祓川の被葬者が短甲を入手した背景は、この地域が軍士徴発地として王権軍事機構の一端に組み込まれたことを想定してよいだろう。

竹並横穴墓群の所在する豊前の京都平野も上述した甲冑集中域の一つで、同時に5世紀後～末葉以降の前方後円墳集中分布域である。5世紀後葉以降に前方後円墳が集中的に築造された地域が、四国西部から九州北東部にかけて点在する。愛媛県の松山平野、九州北部の京都平野と曾根平野、津屋崎地域などで、その築造数は他地域と比べてはるかに突出している。これらの地域は、河内から筑前那津にいたる瀬戸内航路の要衝に位置する。想像をたくましくすれば、王権による対朝鮮半島政策の兵站地として何らかの機構・施設が整備・配置された可能性も想定されうる。この地域の首長層はそれらを差配する権能を付与されることによってより優位な地位を獲得し、前方後円墳築造数に地域間格差を生み出したのであろう。

5世紀後葉に京都平野の竹並や中津平野の上ノ原に初現期の横穴墓が成立したのは、徴発された日向・大隅出身の軍士が集結ないし移住し、彼らの出身地の墓制がその地に移植された結果と想定したい。

(付) 確実な6世紀代の地下式横穴墓が福岡県や遠く栃木

重なる資料となる。類例をご存じの方からご一報いただければ幸いです。

#### 註

1. 1970年に乙益重隆さんがこうした見解を提起したのち、考古学だけでなく古代史の分野にも広く受け入れられた(乙益1970)。
2. 2001年、九州前方後円墳研究会が行った研究大会での九州内における横穴墓と地下式横穴墓の網羅的集成と整理されたデータがその基礎となった(九州前方後円墳研究会2001)。

#### 参考・引用文献

- 乙益重隆1970「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本』3、角川書店
- 田代健二2005「横穴墓の成立過程」『古文化談叢』第53集
- 池 珉周2005「公州丹芝里横穴墓群発掘調査概報」『日本考古学』第19号
- 橋本達也2007「九州の中期甲冑」『九州島における中期古墳の再検討』(第10回九州前方後円墳研究会)
- 柳沢一男2005「百済地域で発見された横穴墓とその背景」『東アジアの古代文化』125号